Vol. X, Pt. 3, 1959

蝶と蛾 Tyô to Ga

(Transactions of the Lepidopterological Society of Japan)

奄美群島の蝶類（2）

川副昭人[1)]

On the butterflies from the Amami-Guntō (2)

By AKITO KAWAZOE

4 オジロシジミ

東南アジアから南太平洋各地域に広く分布する本種は，古く1916年愛媛県松山から記録されて以来全く採集されず，勿論これは迷蝶としてわが国産蝶類のリストに加えられることはなかった．しかるに1951年高知市より1♀が得られて以来，鹿児島県（坊津町久志）・長崎県（対馬：厳原）より次々と記録されるようになり，奄美群島でも1956年10～11月久保邦照氏によって大和村今里から計11頭が採集された．

筆者は1957年8月名瀬市東郊及び宇検村湯湾より夫々1♂，1♀を得たのが最初であるが，58年には宇検村田検において7♂6♀のほか卵及び各令幼虫を多数採集，また住用村川内でも数頭の本種を目撃，1♀を得た．同島ではその他にも分布が広いようで，個体数も少くないものと考えられ，土着の北限をなす可能性も想像される．以下本種について述べたい．

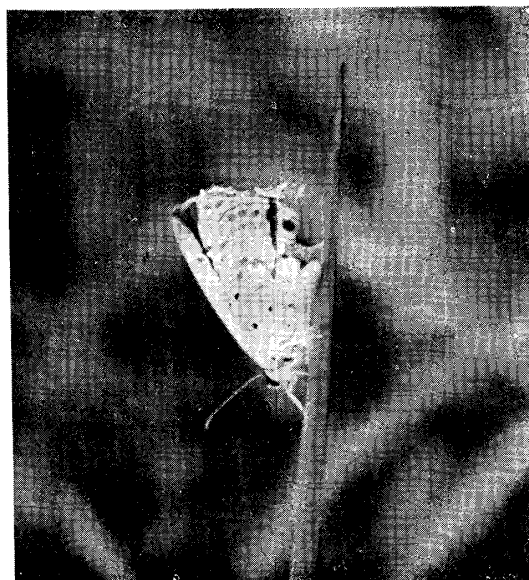
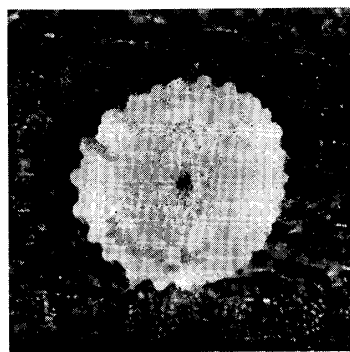
Fig. 10 *Eucrysops cnejus* FAB. ♀
オジロシジミ

幼虫の食草 筆者が上記宇検村で確認したものはオオヤブツルアズキ *Azukia* (*Phaseolus*) *reflexo-pilosa* OHWI であるが，これに限らず一般にアズキ属の野生植物であれば区別することなく食餌とするもので，蕾・花及び若い果実を食する．

卵 卵はこれら食草の花及び蕾の基部・若い果実の莢上又はこれらの附近の花梗・葉面等に1卵ずつ産付される．淡青緑色小型円盤状をなし，直径0.56 mm（突起を含めて）．卵の上面は平坦で一様に不規則な網目構造を有し，精孔は小さく，その周辺はやゝくぼんでいる．上面の外周部から側面にかけてはゆるやかにふくらみ，こゝに短い鈍突起を並べる．これらの各突起は，それぞれの基部から放射状に走る小隆線によって互いに連絡され，粗い三角網状を呈する．

Fig. 11 卵

幼虫 卵から孵化した1令幼虫は花および蕾の附近に発見される．花弁に

1) 大阪市浪速区宮津町76

小型のまるい食痕を残すが，その内部にもぐりこむことはないらしく，屡々歩行中のものを見ることができる．2令以降の幼虫は若い果実を好んで食するが，このときは莢の外側から孔をうがち，体前半を莢内に入れて内部の豆を食う．時には全く莢内にもぐることがあるが，隣合う豆を引きつゞき食ってゆくことはないようである．

終令幼虫の体長 12～14 mm，幅 4 mm．頭部は小さく，その幅僅かに 1.1 mm．黒褐で光沢があり，長毛を疏生する．胴部は概ね緑色でその色斑は個体によってかなりの変異があり，又成長するに従って変化する．一般に各斑紋は黒褐色の第2次刺毛により皮膚の地色以上に一層強調されている．背線は淡紫褐色乃至赤褐色．各節後半において濃色となってみえ，時には各節で断続しているが，これは上記刺毛によるものである．胸節及び第7腹節以下にあっては，背線は幅広く拡がり，太く赤紫色をおび，個体によってはかなり濃色で美しい．亜背には，これも刺毛の色で強調された濃緑の八字紋を並べ，また基線に沿っては各節がうすく紫色を呈する．以上で知られる通り，本種の幼虫はかなり派手な感じのするものであるが，蛹化前には淡緑褐色の背線のみを残して他は斑紋消失し，一様に草緑色となる．なお，中令時にあっては終令時よりも濃色，斑紋顕著で，背線は濃紫褐色，八字紋は黒褐色を呈する．第1胸節の平面形はほぼ梯形をなし，背面は菱型に大きく凹陥してその横幅は 1.0 mm に達する．凹陥部には前半に半月型の前背板があるが，その表面には他の体表一般と同様の第2次刺毛を密布するので，光沢を欠き不明瞭である．第2胸節はやゝ長く，前縁は背線両側で軽く後方に彎入し，第3胸節はその前縁が背線附近で後方へやゝ彎入する．第7腹節背面後寄りに三日月型の蜜腺が開口し，その横幅 0.7 mm．第8腹節気門後下方には左右1対の伸縮突起出入口があり，直径約 0.30～0.33 mm．伸縮突起は白色肉柱状で直径 0.20 mm．突出時に先端の微毛が開くことは他のシジミチョウ幼虫と差異がない．第1胸節及び第1～8腹節気門は小型楕円型を呈し，長径 0.06 mm，短径 0.04 mm，外周に 0.015 mm の幅の黒褐色環を具えている．

体節各部の長毛の分布は次の通り．先ず，背線上には，近似種ウラナミシジミと異り，長毛を具える．但し，第1胸節及び第7腹節以下には背線上に長毛を欠く．第2胸節ではこの長毛は比較的短く 0.10 mm，前後に2対生じ，前方の1対は前縁から胸節長の¼の所に，また後方の1対は胸節ほゞ中央にある．第3胸節～第6腹節の各節には何れも1対の長毛を有し，長さ 0.32～0.37 mm，後方に向ってやゝ彎曲する．位置は各節中央やゝ後寄りで，後方節ほど節の中央部から離れている．なお，この長毛の前方には長さ 0.08～0.10 mm の短毛が1対存する．次に基線上にあっては，第1胸節前縁および第10腹節後縁に長毛が並んで生じ，長さ 0.33～0.43 mm．他の各節基線上には長毛少く，第2胸節で4～6対．第3胸節で2～4対．以下の腹節には1対の長毛を生ずるにすぎない．何れも長さ 0.35 mm 前後．次に，体下面には各節とも長毛を多く生じ，0.07～0.35 mm．特に体下面では微小な第2次刺毛が長毛に移行するものが多く，その長さが長毛附近で連続している．以上の長毛はすべて無色大型の上下2段から成る socket から生じ，その下段は直径 0.08 mm，高さ 0.07 mm．上段は長さ 0.04～0.05 mm で上方に細まっている．

第2次刺毛は胴部の全表面に分布しており，ルーペで見ると無数の点刻をちりばめたように見える．その形は通常単純な針状であるが，背線上の長毛を囲む部分では長毛基部に向って曲っており，中には星芒状裂片の上から直ちに水平に，横方向にのびているものもある．このようなときには屡々その上面に歯状突起をあらわす．また，第7腹節蜜腺周辺部では，上面扁平で平面形の円い傘型に変形している．裂片の数は2～4．各裂片は外上方に向かって鋭くとがっており，その先端部に囲まれて円錐台形の刺毛基部があり，その上に刺毛をのせている．裂片基部からの長さは 0.08～0.09 mm．以上の第2次刺毛には無色のものと黒褐色のものとがあり，一般に有色毛は各節斑紋の濃色部に分布している．

蛹　蛹ははじめ緑色，後次第に黄褐色となる．長さ 11 mm，幅 4.2mm．全体に微小な，かつ形の不規則な黒褐色点紋をちりばめているが，体下面には少く，腹節背面には特に多い．腹部背線上にはこれがやゝ大き

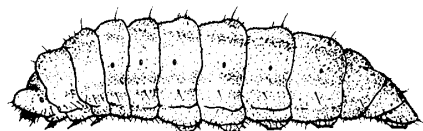



Fig. 12　終令幼虫

く集まって不規則に断続する黒色線を形成するものが多いが，全くこれを欠くものもある．第1腹節の後翅との接合線附近には前後2対の黒点があってしばしば連続し，長い1紋となる．また第2〜第6腹節上，気門上後方には1対の明瞭な黒色紋を有し，一見気門と見あやまる．しかし気門は体と同色，不明瞭で，わずかに体表から突出している．

前胸及び頭頂は半球状をなし，前胸〜中胸縫線部がくびれていて，だるま型を呈する．中胸背面はやゝ隆起し，その後縁は楔型に深く後胸へ入り込んでいる．後翅は第2腹節前半部において前翅の内側に全くかくれる．体は第3腹節附近で高さ・幅共に最大となる．第8腹節以下は強く下方に曲り，そのため第9腹節背面は見かけ上の体後端部を形づくっており，第10腹節は第9腹節の全く下面に癒着している．

体下面の構造は一般のシジミチョウ類のそれの例外ではない．左右の上唇小片は相接し，その縫線はかなり長い．下唇鬚は現われない．下顎ははじめ太く，急に細まり，前翅頂までの半ばに達せずして触角の内方にかくれる．触角は前翅頂部で切断され，第5腹節内のその後縁部で終っている．

各体節部には全面に黒色の針状微毛を生じ，その長さは 0.10〜0.12 mm，黒褐色のリングを基部に具えている．これとは別に，頭頂部，および第5・6腹節気門後方の顆粒部には，多くの分枝をもつ羽毛状刺毛群があり，その長さはやゝ短く，0.09 mm 内外．

成 虫 幼生期は極めて短かいものらしく，筆者の飼育したものでは終令期5〜6日，蛹期7〜9日で羽化した．観察を行った地域にあっては食草は小群落をなし，同一株に熟した果実と共に若い蕾を多数つけており，次々と花を開いているようであった．かゝる点から考えて，本種は夏〜秋季にかけて間断なく発生をくり返しているものと思われる．同地における3月の所見では，食草は枯死していないが未だ新芽を出しておらず，従って勿論花や果実は見られなかった．成虫も全く目撃できなかったので，その越冬に関しては全く不明のままである．

夏季においては大島のほゞ全域に見られるものと思われるが，食草附近には多数の蝶が飛翔している．習性はウラナミシジミよりやゝ不活潑で，殊に草食近傍で著しい．

5 数種の蝶の越冬態について

1959年3月下旬〜4月上旬にかけて，筆者は再び奄美大島へ渡り，春季の蝶に接することができた．今回の採集には越冬に関する若干のヒントをつかみ得たので，とりあえずその状況を報告しておこうと思う．なお在島中種々御教示並びに御世話いただいた鹿児島県立大島高校教諭森田忠義氏に心から御礼申上げたい．

Fig. 13 蛹背面　Fig. 14 蛹側面　Fig. 15 蛹腹面

1．オキナワビロウドセセリ　食樹クロヨナには新芽が多く，大破した♀が盛んに産卵を行っており，多数の卵と共にすでに中令にまで育った幼虫が見られた．本種の幼虫の生育は非常に速く，採集したものが4月中旬に終令となった程なので，幼虫は概ね3月に孵化したものと考えて誤りはないと思う．従って，本種は明らかに成虫で越冬の後，春季に産卵するものと判断される．

2．オオシロモンセセリ　食草ゲットウには比較的新しいと思われるような食痕は全くなく，また，新たに産付された卵は未だ極めて少数であった．成虫は数が多かったが，この時季のものは夏季のものと明らかな斑紋の差異を持っている．筆者は宇検村においてかなりの蛹殻に混じて羽化直前の蛹1頭を採集，室内羽化せしめた．以上から，本種は蛹で越冬しているものと断定してよいであろう．

3．リウキウミスジ　食草ヌスビトハギは新芽を出してなお日が浅く，新しい食痕も見当らなかった．成虫はすでに小破損したものが多かったが，内地におけるコミスジと同様に終令幼虫〜蛹で越冬するものと想像される．

4．アカホシゴマダラ　エノキの古木を中心にかなりの数の飛翔を目撃し，採集してみた結果は意外にも明らかに越冬したと思われる夏型の成虫であった．森田氏と共に食樹を探索してみたが，卵・幼虫・蛹の何れをも採集出来なかった．本種が越冬を成虫態で行い，翌春産卵を行うと断定するにはなお若干の躊躇を感ずるものであるが，目撃した本種が，たまたま生き残って春を迎えたものとするには飛翔個体が多すぎるように思われる．

5．テングチョウ　大島における本種の発生は少くとも年2回以上に亘っており，おそくは10～11月にも羽化することが知られている．3月末の知見では多数の越冬母蝶が産卵を行っている一方，卵より蛹に至る各ステージの幼生が多数混合しており，既に羽化脱出後の蛹殻さえ見られた．筆者は幼虫を若干採集しておいたが，何れも4月14～21日の間に羽化を完了した．なお，同島におけるテングチョウの発生は実におびたゞしく殆んど葉を食い尽くされているエノキが少くない．

小蛾数種の学名について[1)]

黒子　浩[2)]

Notes on the nomenclature of some Microlepidoptera in Japan

By Hiroshi Kuroko

このたび日本産の小蛾類について3種のシノニム及び其の他 2・3 の学名上の知見を得たので報告する．この小文を書くにあたり，筆者の所蔵する標本と北海道大学所蔵の松村松年博士の模式標本との比較の労をとられた同大学昆虫学教室の久万田敏夫氏に，又貴重な御教示を与えられた西ドイツのキバガ類の研究者 Klaus Sattler 氏に心からの謝意を表する．

シノニム3種

Family Oecophoridae

Cryptolechia malacobyrsa Meyrick ホソオビキマルハキバガ

Cryptolechia malacobyrsa Meyrick, Exot. Microlep., **2** (12) : 394, 1921

=*Depressaria bicinctella* Matsumura, 6000 Ill. Ins. Jap. : 1089, no. 2236, 1931 (**syn. nov.**)

Promalactis sakaiella Matsumura フタスジマルハキバガ

Borkhausenia sakaiella Matsumura, 6000 Ill. Ins. Jap. : 1089, no. 2233, 1931

=*Promalactis autoclina* Meyrick, Exot. Microlep., **4** (19) : 592, 1935 (**syn. nov.**)

Promalactis jezonica Matsumura ギンモンカバキバガ

Borkhausenia jezonica Matsumura, 6000 Ill. Ins. Jap. 1088, no. 2232, 1931

=*Promalactis symbolopa* Meyrick, Exot. Microlep., **4** (19) : 593, 1935 (**syn. nov.**)

Agonopterix l-nigrum Matsumura (Oecophoridae) クロカギヒラタキバガ

Depressaria l-nigrum Matsumura, 6000 Ill. Ins. Jap. : 1091, no. 2244, 1931

本種に対しては従来ヨーロッパと共通の *conterminella* Zeller なる学名が使われていたが，最近の Klaus Sattler 氏からの通信によると"日本で *conterminella* として取り扱われている種は真の *conterminella* と外観上極めてよく似ているが，その genitalia の形態に著しい違いが見られる．genitalia は *ferulae* Zeller に近いが，これとも別種であるので，日本の種は *l-nigrum* Matsumura を用うのが正しいと思われる"とあった．或は真の *conterminella* が混棲しているのかも知れないが，これで *conterminella* なる種名は日本の fauna から消

---

1) Contribution Ser. 2, No. 1, Hikosan Biological Laboratory, Kyushu University.
Contribution Ser. 2, No. 23, Entomological Laboratory, Kyushu University.

2) 福岡県田川郡添田町彦山　九州大学附属彦山生物学研究所